

中国のほんの話 (25) 1930年代上海文化の復活

蔭山 達弥

近頃、中国では夜のゴールデンタイムに放映されるテレビドラマに清朝末期、民国期(1911~49)の中国を舞台にしたものが多い。清朝末期、山東省のある村で15歳になる陳六子という乞食を生業としていた少年が、成功へと歩んで行くサクセスストーリーである『大染坊』、1920年代の中国、安徽省蕪湖の娼館で働く潘玉良が上海からやって来た潘贊化との運命的な出会いにより芸術に目覚めてゆく『画魂』、林語堂が30年代アメリカ在住時、英語で執筆した『風聲鶴涙』、張愛玲の大ベストセラー『半生縁』など枚挙にいとまがない。

1939年に中国河南省に生まれ、台湾に移り住んだ後、1970年にハーバード大学で博士の学位を取得し、現在、ハーバード大学で中国の現代文学と文化を専攻している李欧梵教授は1930年代の文学、特に「新感覚派」の作品群を高く評価する。(李教授の最近の著書には、心血を注いで1930年代上海文化を研究した『上海摩登(モダン)』や『中国現代文学と現代性 10講』などがある。)李欧梵教授の研究する上海は租界時期(1842~1943)の上海、西欧化した上海、そこにある映画館、喫茶店、ダンスホール、町並み、施蛰存、穆時英、劉呐鷗等の「新感覚派」作家の作品である。そこには張愛玲の『伝奇』、『半生縁』なども含まれる。

広州の新聞『南方週末』のインタビュー記事(2004.1.22)の冒頭、「あなたは新感覚派の作家に対して評価が高く、彼らの作品はとて『現代』(近代的)であると言っておられますが。」との問いに対して、李教授は「『現代』という字は1920年代に非常に流行し、その用法は常に時代とつながっており、関係しあう『新潮』、『時代の巨大な車輪』等のイメージを使って、歴史が前進するという観念を代表する。1930年代初め、雑誌『現代』が登場した。そのフランス語の名前は『当代』すなわち『Contemprain』である。当時はなぜ『現代』と

呼んだのか。施蛰存によれば、『現代』という書店があったが、当時日本が上海を爆撃し、ずっ

と重要な雑誌が出ていなかった。施は一冊の雑誌を出そうと思って、そこで『現代』と名づけたのだ。葉靈鳳も『現代小説』のような雑誌を何冊も編集した。その頃、『現代』という言葉が非常に流行っていたことがわかる。当時、施蛰存、穆時英、劉呐鷗等の「新感覚派」の作品のストーリーには近代的な実験があり、現代人の都市生活が人にもたらす心身の衝撃を描いている。しかし、各人の表現形式も全く同じではない。例えば、施蛰存は私(李欧梵)にこう言った。劉呐鷗は表面的に描いているのは上海だが、実際彼は上海を全然分かっていない。描いているのはやはり東京だ。しかも彼自身の作品の都市生活に対する衝撃の表現は写実を超えた奇怪な世界がより多く漂っている。施が李教授に言うところによると、彼の小説は英語の二つの字で括ることができる。一つは『erotic』すなわち『愛欲』、もう一つは『grotesque』すなわち『ばかげた』である。」と答える。

李教授が高く評価する女流作家・張愛玲は1995年ロサンゼルスでこの世を去った。彼女の死亡記事は中国のあらゆる新聞雑誌に掲載された。彼女は晩年、ロサンゼルスでひっそりと暮らしていた。張愛玲は日本軍の香港占領によって、香港大学を繰り上げ卒業した後、上海に戻り、彗星の如く文壇に登場し、1943年から僅か2年間で10余りの短編小説と無数のエッセイを流行雑誌に発表した。彼女の最初の作品集『伝奇』は僅か4日間で売り切れた。1997年に広州の花城出版社から出た彼女の作品集の編者・費勇は「張愛玲はただ一人、男女間の『愛』を深く分かっている人だろう。」と言っている。中国で、人間の心の中に潜む愛欲や欲望を描いた1930年代の作品に今ようやく光が当たろうとしている。

かげやま たつや(助教授・中国文学)

